

これはご承知のように低層の場合には正確なものを出せません。できるだけざっと調べてみたところでは、詳しい内容の結果はまだ出ておりませんが、ゾンデ観測をもとにして今後いくらかは関係を調べていけると思っております。今年の冬にはとくに煤煙の調査として、地上以外の煤煙の観測を高層気象台から機械を貸してもらいまして、やりましたが、始めてですから中々うまくいきませんでした、わずか数回しか観測しませんでした、無理矢理に数字をいうならば、40メートルあたりで割合にマキシマムの濃度が出たというのですが、無理矢理の数字でありまして、別に飛行機でやりましたけれども、これもご承知のように500メートル以下へは降りられないので、やっぱり低いところは飛行機ではいかなかった。市内に今度テレビ塔が出来ましたので、テレビ

塔が120メートルまでありますから、そこへ機械を取付けて実験するはずであります。これに一番期待をかけております。もっとも気象観測に併行して煤煙の方もはかるように、話を進めております。

そういうふうには小規模ながら札幌も大気汚染については、いくらかのコオリレーションができるようになってきたと思います。

なおさきほどもお話がありましたように、目で見える煤煙については、札幌なんかでは現在は煤塵の方が問題になっておりますが、よくこの方面のことは知りませんが、外国なんかでは煤塵よりもSO<sub>2</sub>の方が被害額の方も大きいと思いますが、いまはどうすることもできないので、まず煤塵の方からの段階だとそう考えております。ざっと以上であります。

## 支部だより

### △…第1回東北支部気象学会開催さる…△

日本気象学会の東北支部は既報(本誌Vo1.4 No.8P.266)のように本年6月20日に設立発足し、その第1回支部気象学会が予定通り10月30日盛岡市で開催された。

地元県よりは山本理事外会員21名、他県からは間野支部長、山本、伊藤、梅田、高橋理事ら10名、計31名が参集、下記の研究発表と特別講演、終って会員の懇談会があり16時半会を終了した。

### 研究発表

1. 異った緯度に見られる準定常波の季節変動について  
安藤 正次(気象研)
2. 水爆による微気圧振動について  
伊藤 亀雄(山形地気)
3. 尾瀬原湿原の河川流出に対する影響について  
浅田 暢彦(仙台管区)
4. 昭和31年9月30日の宮城、福島両県境の地震について  
田 卷 健(宮古測)
5. 風のエネルギーについての一調査(風力発電のための気象調査報告)  
渡 辺 正 雄(仙台管区)
6. 擾乱の型と岩手県における雨量分布の推移  
関 根 勇 八(盛岡地気)

### 特別講演

7. 天文屈折と気象との関係 須 川 力(水沢緯観)
8. 週期の検出法について 石 川 栄 助(岩手大学)  
上記各講演内容は凡そつぎのとおり。
1. 安藤氏のもは、主として北半球全域に亘り、500mbにおけるリッジ、トラフの位置、消長が季節によりどのように変動しているか。又高緯度、中緯度間においてどのような関係を保っているかを論じ、長期予報への手掛りを求めようとした氏特有の労作。
2. 伊藤氏のもは、アメリカの原水爆実験による微気

圧振動の観測資料より音の異常伝播を論じたもので、本研究より1957.7.21のものは従来の場合と同様対流圏内での爆発であるが、翌7月22日のものは地表35乃至40上空での爆発となり従ってロケット或はICBMとうにより打上げられたものと推定される。

3. 浅田氏のもは尾瀬原のスポンジ様の湿原地帯が急激な降雪による積雪荷重によって、湿原の保有水が圧縮流出され、尾瀬原特有の流出ピークを示していることを1954、1955年の実際の観測資料により明らかにしたものの。(詳細は近く電力気象彙報、雪氷とうに掲載)

4. 田巻氏のもは、標記の地震について初動分布の型を高木氏による円錐型分布を適用して大体これに近いものであることを確かめ、更により観測事実と一致せしめるため象限型分布の適用を試み、前者と同程度に一致する結果を出したものの。

5. 渡辺氏のもは、風力を発電に利用する場合のエネルギー量を酒田の風について計算を試みたものの。

6. 関根氏のもは、北上川流域の水理気象業務を確立するための一分野である「同流域の局地面積雨量の予報精度予報と期間の延長を如何にして高めるか」ということに努力されたもので、擾乱の型により雨の降り始めの雨量分布との関係を求め、これによって或る型の擾乱については降り始めの分布を知ることによってその後の面積雨量が流域別に予想することが可能となるわけで、実用性に富んだ局地予報の一手段を示したものの。

7. 須川氏のもは、緯度観測におけるいわゆるZ項の本質を明らかにするため現在まで試みられて来た数々の研究効果を系統的に整理、特に気象はどのような形が影響し、どのような形で導入解析しているかを紹介したものの。

8. 石川氏のもは、週期分析法において在来のものよりもよりシャープに、かつその結果に対する有意性も同時に表現出来る方法をWhittakerの方法を基に新に考え出されたもの。要するに各週期における標本群がその群内での分散が小さい程、かつ群間の差が大きい程週期性があるという考え方を理論的に表現する一方法を考え出されたものである。

(以上文責、支部常任理事 高橋正吾)